

## エゴ・レジリエンスがポジティブティに与える影響(2)

—Fredrickson 理論に親子関係はどのようにかかわっているか—

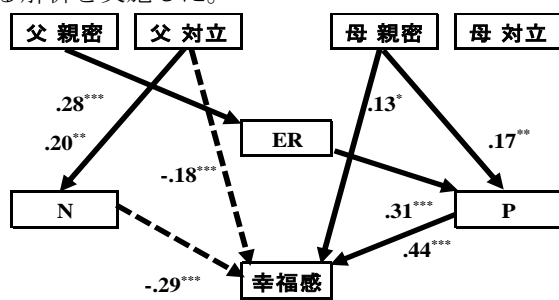
○小野寺敦子<sup>1</sup>・畑 潮<sup>2</sup>

(<sup>1</sup> 目白大学・<sup>2</sup> エゴレジ研究所)

**【目的】** ポジティブ情動の拡張—形成理論の提唱者であるFredrickson (2009) は、ポジティブティとエゴ・レジリエンス (以下ER) とはセットとして考えるべきであるとしている。ERが高くなればポジティブティも高くなり、ポジティブティが高くなればERも高くなるというわけである。このポジティブティは感謝・愛情・楽しみ・喜び・希望・感動などの幅広い肯定的な感情から成立しているとFredricksonは指摘している。一方のERは「状況に応じて柔軟に自我を調整し日常的なストレスにうまく対処し適応できる能力」とBlock & Block (1981) は定義し、14項目からなるER尺度を開発している (Block & Kremen, 1996; 畑・小野寺, 2013)。そこで本研究では「エゴ・レジリエンスがポジティブティに与える影響」(1) に続き父親/母親との情緒的結びつきとERとの関連, さらにERとポジティブティがどのように関連しているかを検討する。

**【方法】** 1) 調査対象者: 東京都内の大学生345名 (平均年齢=19.04歳; 男性78名, 女性267名) を対象とした。2) 分析内容: (1) ER89日本語版尺度 (畑・小野寺, 2013; 14項目4件法) (2) ポジティブティ (以下P) とネガティブティ (以下N) からなるポジティブティ比尺度 (Fredrickson, 2009; 20項目5件法) (3) 父子関係/母子関係を尋ねた各6項目・4件法 (例: 父親/母親と私は意見が対立する・心配事があると父親/母親に相談する) (4) 幸福感尺度 (1項目10点法)。

**【結果】** 1) 因子分析: (1) ER は、主成分分析により 14 項目 1 成分分解 ( $\alpha=.78$ ) を確認し合成得点を算出した。(2) P と N は、P10 項目と N10 項目の合計点をそれぞれ P 得点 ( $\alpha=.79$ ) ,N 得点 ( $\alpha=.89$ ) とした。(3) 父子関係/母子関係に関する項目は、父母別々に因子分析 (主因子法・プロマックス回転) を行い、どちらも親密関係 (6 項目) と対立関係 (6 項目) を示す 2 因子が抽出された。各因子の 6 項目の素点を合計し項目数で割った合成得点を算出し、父親親密 ( $\alpha=.89$ ) 父親対立 ( $\alpha=.87$ ) と母親親密 ( $\alpha=.91$ ) 母親対立 ( $\alpha=.87$ ) と命名し得点化した。(4) 幸福感は回答の素点を用いた。2) ER と得点化した諸変数との相関係数の算出: ER は、P ( $\gamma=.34$ ) , 父親親密 ( $\gamma=.23$ ) , 母親親密 ( $\gamma=.15$ ) 幸福感 ( $\gamma=.26$ ) と有意な正の相関が認められたが、N および父母との対立とは無相関であった。また、幸福感は、P ( $\gamma=.43$ ) と父親親密 ( $\gamma=.31$ ) , 母親親密 ( $\gamma=.32$ ) との間に正の有意な相関が認められ、N ( $\gamma=-.31$ ) との間には負の有意な相関が認められた。さらに P と父親親密 ( $\gamma=.18$ ) , 母親親密 ( $\gamma=.25$ ) の間にも有意な正の相関が、N と父親対立 ( $\gamma=.23$ ) , 母親対立 ( $\gamma=.18$ ) の間にも有意な正の相関が認められた。3) 仮説モデルの検証: 上記の結果に基づき「親との関係が ER を高めポジティブティを介して幸福感を高める」という仮説モデルを検証するために構造方程式モデリングによる解析を実施した。



\*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

図1. 仮説モデルの検証結果

モデル適合度は GFI=.990 AGFI=.973 RMSEA=.000 であり一定の基準を満たしていると判断できた。このモデルでは、父親親密から ER へ有意な正のパスが、ER からポジティブティそして幸福感へと正のパスが認められた。また母親親密からは、P を経由して幸福感へ行くパスと、直接幸福感へと向かうパスが確認された。一方、父親対立からは N へとパスが向かい、その N を介して幸福感へは負のパスが確認できた。また父親対立から幸福感へは直接、負のパスが認められた。

**【考察】** 本研究では親子関係が ER とポジティブティへ与える影響を検討した。その結果、大学生男女共に父親との親密な関係が ER を高め、それがポジティブティに影響を与え幸福感へと繋がるというパスを明らかにした。母親よりも父親との良好な関係が ER そしてポジティブティを高めるのに重要であるという本結果は、父親の役割の大切さを示すものである。一方の母親との親密な関係は ER を介さずにポジティブティに影響し幸福感へと向かうパスが認められた。しかし父親に対立感情をいただいていると幸福感は下がり、またネガティブティ感情が高まり幸福感を下げるということが明らかになった。